

平成 28 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が870編も寄せられました。王尾富美子委員長、桐野輝久副委員長、萬俵好明、宮代哲彦、萩元幸治、井上讓委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀6編、佳作38編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

最優秀賞

会いたい人

県立大和西高等学校 二年

高田 夏美

「信号を守ればあなたにまた会える」と聞いて、どんな感情がみなさんに湧くだろうか。冒頭の言葉は私の通学路に貼られている標語だ。初めてこれを見た時は、あまり気に留めることなく、むしろ何も変わらない日常の景色に溶けこんでしまっていた。だが、その言葉が胸に深く突き刺さる日が来るのは、そう遠くはなかった。

とても日差しが強かったあの日の朝、私は友人と遊ぶ約束に遅刻しそうになっていたので、一刻も早く着けるよう精一杯自転車を漕いでいた。しかし、そんな私の前に現れた横断歩道。信号は赤く光り、私を制止する。しかし、その横断歩道は人の往来も車の往来も少ないことを知っていた私。「ごめんなさい、今回だけは。」日差しの強さに急かされるように私がペダルに足をかけ漕ぎだそうと少しづつ前に自転車を押し出したその時だった。「危ない！」その声が耳に届き、すぐに自転車を引つ込めると、数センチもないすぐ横で、私と同じく自転車に乗っていたおばあさんが力強くブレーキを握っていた。「すみません、大丈夫ですか。」私はそう言って駆け寄った。

ゆっくりと自転車を降り、私の元へ歩くおばあさん。私の心の中は怒られるだろう。ということだけだった。だが、そんな私の気持ちを知っていたかのように、おばあさんは優しく私に微笑みかけてくれたのだった。「急いでいたのかい。」そして静かに、おばあさんは私の心に届くように丁寧に言葉を続けた。「もし、人と会うために急いでいたのなら、その時こそ、しっかり信号を守りなさい。今、車が来ていたら、あなたが会いたかった人に会えなくなってしまうでしょう。それはとても悲しいでしょう。」そう言い終わると、「気をつけていってらっしゃい。」と言って走り去ってしまいました。

私はしばらくその場に呆然と立っていた。自分の行動を深く恥じた。そして、おばあさんの言葉が私の頭の中を駆けめぐった。「会いたかった人に会えなくなってしまう。」確かにそうだと思った。同時に、いつも見ていた風景の中のある標語も、ふと現れた。「信号を守ればあなたにまた会える。」通学路に貼られていただけの言葉を心に強く留めた時だった。もしあのままぶつかっていたら、そしてそれがもし自転車でなく車だったら、きっと後悔で満たされていただろう。

交通ルールは、自分の身だけを守るのではないと思う。これから始まる思い出も守ってくれる大切な約束だと私は考える。横断歩道のボタンを押した私は、これを伝えていこうと強く決意した。

最優秀賞

いつでも地域に安心を 〜地元野菜で備えを常に〜

県立吉田島総合高等学校 二年

井上 友花

私は今、「開成弥一芋」について研究を行っています。開成弥一芋とは、神奈川県開成町で栽培されている特産品で、甘くねっとりとした食感が特徴的な、煮物などにしても煮崩れしないとても品質の良い里芋です。しかし、戦後、米作や新しい品種の台頭により生産量が激減。生産している農家はごくわずかとなってしまい、幻の芋と呼ばれています。「美味しくて町に由来がある開成弥一芋を復活させよう」と二〇〇九年から「開成弥一芋研究会」の皆さんが取り組みをスタートさせました。ちょうど、私が中学二年生の時、開成町唯一の中学校、文命中学校では、給食に開成弥一芋を使ったカレーが出されました。あの時の弥一芋カレーの味は未だに忘れられません。

そんな弥一芋に興味を持った私は、高校入学後「開成町弥一芋研究会」に連絡を取り、まちづくり部産業振興課の方も交え、町役場で話し合いを持った結果、普及が今一つ進んでいないことや、栽培を続けていく上での問題点があることを知ったのです。そこで、高校生の私に出来ることは何かと考え、栽培用の種芋生産と普及活動に焦点を絞り、問題点を解決していくことを話し合いました。

栽培をしていく中で、ブランド化していく開成弥一芋には、規格外の芋ができることを知りました。この芋を何とか利用できないかと考え、学校の製粉機を使用した製粉を思いつきました。粉にすれば、パンやうどんが作れますし、収穫期の冬だけでなく、一年中、開成弥一芋を食べられます。

そう考えていた時、熊本の大震災のニュースを耳にしました。そして連日放送されるニュースのインタビュウの中で、「非常食も食べ飽きて、地元野菜が食べたい。」「お母さんの料理が食べたい。」といったお年寄りや子どもたちの声を聞いたのです。その時開成弥一芋を粉にすることによって保存食ができるのではないかと考えました。私たちが暮らす日本は災害による被害が多く、いつどこで被害に遭うかわかりません。もし被災したら、毎日不安や恐怖で眠れなくなってしまうことや、ストレスを感じることもあるでしょう。しかし、避難生活の中で食事に私たちが普段食べている地元の食材が入っていたらどうでしょうか。保存食の中に身近なものがあるだけで、安心感が繋がるのではないかと思います。

元々里芋というのはカリーが他のイモ類よりも低く、カリウム、食物繊維が多く含まれていて、肥満症の元となるコレステロールの増加抑制が期待されています。避難生活をするなかでも常に健康でいてほしい。そんな思いもあり、この開成弥一芋が保存食に適しているのではないかと考えたのです。

今はまだメニューの試作段階ですが、不安な状況でも地元の食材で安心感を持ってほしい。そんな夢の実現のため、「地元野菜で備えを常に」を心に刻み、私の活動はまだまだ続くのです。